



研究者総覧：越智 和弘 (OCHI, Kazuhiro)

氏名	越智 和弘 (OCHI, Kazuhiro)	
職名	教授	
所属講座	国際多元文化専攻先端文化論講座	
学位（専攻分野）	博士（文学）・名古屋大学	
メールアドレス	ochi@lang.nagoya-u.ac.jp	
個人のホームページ	http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ochi/	
研究分野	ドイツ文学	
	文化思想論	
	表象文化論	
現在の研究テーマ	労働力均質化時代の性と芸術	
所属学会	日本独文学会	
	表象文化論学会	
	日本ラカン協会	
主要著書・論文	女性を消去する文化、単著、鳥影社、2005年、408頁	
	フロイト全集6、共訳、岩波書店、2009年	
	ペーター・シュナイダー「父よ!」、単訳、鳥影社、2007年	
	ジェンダーを科学する、共著、ナカニシヤ出版、2004年	
	トーマス・ヘッチェ「夜(NOX)」、単訳、白水社、1997年	
自己紹介文	<p>私の研究は、今ではあまり耳慣れない文学社会学から出発しています。これは社会学の一派ではなく、むしろ文学や芸術の範疇に属する学問領域です。文学社会学との出会いは1970年代のドイツ留学にありました。当時は、構造美学や記号論、芸術社会学など、伝統に対抗する文化理論の構築へ向けた動きが盛んで、社会へのアンガージュマンを旗印に再出発したドイツの戦後文学を研究していた私も、こうした最新の学問的潮流に強く影響されました。とりわけ、H.R.ヤウスの『挑発としての文学史』には衝撃を受け、翻訳のない時代に原著を貪るように読んだものです。</p> <p>新しい学問的空氣に触れられたこの時期は、同時に若者の反抗運動が起きた時代でもありました。時がたつにつれ、さまざまな対抗</p>	 <p align="center">著書の表紙カバー</p>

	<p>理論を始め、性の解放やフェミニズムなど抑圧の排除を目指す動きが、すべて西欧近代への批判という共通項によって括られることに気づきました。しかし同時にまた、既成の価値規範を崩そうとしたこれらの運動自体が、じつは資本主義の発展にとり必然であった可能性にも思い至りました。もはや誰も逃れられないシナリオの存在にいち早く反応したのは、いわゆるポストモダンの思想家たちです。私の研究は、文学、社会科学、哲学、歴史学など旧来の学問領域から得られる成果を取り込みつつ、その網目から確実に漏れ落ちるものを、言語と文化の視座からすくい取り、人間の創造性が生き残れる道を探ろうとするものです。</p>
<p>受験生へのメッセージ</p>	<p>人間が数値的評価のみによって測られる均質化した存在へと還元されることで、豊かであったはずの人間生活や、文化、そして個々のセクシュアリティが、商品化という道を経ることなしには、もはや実現しえない時代にわれわれが生きているという認識、また、そうした現実を踏まえうえで、さらに自分が生きている歴史的位置、言語文化的な場、そしてジェンダーなどへの繊細で注意深い感性をもっている方を歓迎します。</p> <p>こうした意識を共有してもらえれば、学問的な出身領域や研究テーマは、私の指導可能な範囲を大きく超えない限り問いません。むしろ、多彩な研究テーマをとおし、互いに学んでいこうという気持で待っております。大学院の授業では、私がこれまで持ちえたささやかな知識を惜しまず提供しますので、若い諸君には、それを踏み台に世界の行く末を見据え、これから自分の生きる道を探るうえでの一助としてほしいと思います。またそれによって、やがては未知の領域を開拓していこうという、勇気ある意気込みで本大学院を目指してほしいと願っております。</p> <div data-bbox="746 1429 1321 1854" data-label="Image"> </div> <p>大学院授業「先端文化思想論」で用いるスライド</p>